都市住宅の植栽から生まれるコミュニケーションに関する研究 — 世田谷区代田・梅丘を対象として —

Study on communication by medium of garden plantings
- in the case study in Daita and Umegaoka area, Setagaya-ku -

木原 朝子
Asako KIHARA

Key Words : 1. 庭園植栽 2. コミュニケーション 3. エクステリア
garden plantings communication exterior

摘要

住宅の植栽から発生するコミュニケーションの実態を明らかにすることを目的とし、都内住宅地の世田谷区梅丘1丁目・代田3丁目で庭づくりを行う住民10人を対象とした聞き取り調査とその分析を行った。

庭の作り手のまわりでは植栽をきっかけにして、多様なコミュニケーションが生まれ、それが庭づくりの楽しさや意欲につながっていることがわかった。個人の楽しみとして庭づくりを行っているだけでなく、まちの一員としての責任をもってとりくんでいた。

道に接し公的性格を持つ庭・外構空間は、地域でのコミュニケーションを活性化させ、快適なまちをつくるためのかぎを握る存在であるといえる。

1. はじめに

環境植栽のもつ様々な効果については、造園・建築・都市計画学等をはじめ、広い分野において研究されてきている。

例えば三沢¹⁾は、緑（広く植物）の効用を第一次効用（生産材）、第二次効用（機能材）、第三次効用（サービス材）の三つに類型化して示している。

- ・第一次効用（生産材）… O_2 の供給・ CO_2 の吸収、食糧・用材・燃料・薬剤、畜産飼料・土地肥沃化
- ・第二次効用（機能材）…建築的機能、工学的機能、気候調節機能、環境指標機能

- ・第三次効用（サービス材）…審美的、知的、レクリエーション的、宗教的、感覚的

また、正木²⁾は住宅の建築を行う際に気をつけたい植栽の機能を「建築的機能」「微気候調節機能」「審美的機能」「環境・工学的機能」の4つの視点からまとめている。

- ・建築的機能…プライバシーを守る、防火・防犯する、区画明瞭化
- ・微気候調節機能…日射しを防ぐ、風をコントロールする
- ・審美的機能…奥行き感を出す、建物を演出する、五感で楽しめる庭
- ・環境・工学的機能…土壌乾燥を防ぐ、空気浄化、減音効果

庭づくりによる環境の個人化という切り口からは、小野³⁾が、共用空間の庭づくりの例として集合住宅の共有地での庭づくりをとりあげ、庭の作り手の言葉を手がかりに、庭づくりによる環境の個人化の有様と意義を明らかにすることを目的とする研究を行っている。

しかし、これまで住宅の植栽が地域社会におけるコミュニケーションに果たす効果については、あまり論述されてこなかった。

景観整備や地域の誇りづくり、花づくりを通してのコミュニケーション育成などを目的として、「花のまちづくり」「花いっぱい運動」といった活動は全国各地で行われており、身近な植栽がまちづくりに果たす役割について

の社会的期待はすでに大きなものがあると言える。

このような現状をふまえ、本研究では、住宅の庭・外構の植栽から生まれる、地域社会のコミュニケーションの実態を明らかにすることを目的として調査を実施した。

コミュニケーションという言葉は人間同士が意志・感情・情報を伝達しあうことである。また、生き物である植物と人間が向かい合ったときにも、人は植物の反応から何かに気づかされたり、植物の姿や表情と言えるようなものに感情を動かされたりする。植物を仲立ちとした人と人との対話・触れ合いと共に、人と植物との対話・触れ合いもコミュニケーションの一種としてとらえることもできるが、本論では、植物を媒体として生まれる人と人とのコミュニケーションを主として扱う。

なお、本文中で「植栽」とは、地植えのものだけでなく、鉢植えの植物も含めて扱っている。

2. 調査

(1) 調査対象

調査対象者は、都内住宅地の世田谷区梅丘1丁目及び隣接する代田3丁目（図。以下、対象地と記す）に住み、庭づくりを行っている30代から60代の女性10名。

対象地は、小田急線梅ヶ丘駅を最寄り駅とする、一戸建て住宅中心の静かな住宅地である（写真1）。対象者10名は、くらしから住まいづくり支援ハウス主催の「住宅の外まわりの花と緑のデザイン講習会」（1996.10.8）に参加した4名（Mさん、Hさん、Iさん、Sさん）と、く

らしから住まいづくり支援ハウスのスタッフで代田の住民である矢郷さんとの調査協力依頼に応じてくれた3名（Rさん、Fさん、Yさん）、Iさんに紹介してもらった2名（Oさん、Kさん）、Rさんに紹介してもらった1名（Tさん）。対象者のうち9名は一戸建て住宅に住み、自宅の庭の手入れをしている。Sさんは調査の2年前から賃貸アパートに住み、その庭の手入れをしている。

写真1 対象地の様子。

(2) 調査方法

庭づくりを行う住民の話の聞き取りとその分析を中心に行なった。

1996年11月に、対象者の自宅（9名）と近所の喫茶店（1名）で話を聞いた。

主な質問項目として次の4点を聞き取った。

①庭づくりの喜び

（庭づくりでうれしいことは何ですか）

②将来の庭づくり希望

（今後どんな庭づくりをしたいと思いますか）

③評価できる近隣の庭

（近所にあるお気に入りの庭を紹介してください）

④自宅以外での庭づくり活動

（自宅以外で庭づくり・花づくりをしている場所がありますか）

(3) 各家の外構（道に面した部分）

対象者の家の外構は表及び写真2～17のような状況であった。

図 調査対象地（1:13,000 世田谷区全図より）

表 対象者の家の外構

対象者	外構 (*備考)
〇さん	大谷石塀
Kさん	ブロック塀
Iさん	ブロック塀。部分的に鉄の柵
	* 2階が住まい。1階は夫の両親が住んでいて Iさんの園芸活動はベランダが主。
Mさん	コンクリート塀。門扉無し
Hさん	金網フェンス。大部分は生け垣との併用
Sさん	アルミの柵
	* 賃貸アパート
Yさん	基部がレンガで、上部が木の柵
	* 2階が住まい。1階は娘の家族
Fさん	花壇。門扉はあり
Tさん	植え込み。門扉無し
Rさん	大谷石の擁壁の上に家が建つ

写真4 Kさんの家のブロック塀。

写真2 〇さんの家。外構は大谷石の塀。

写真5 Kさんの家の門扉。

写真3 〇さんの家の門扉。

写真6 Iさんの家。ブロック塀の一部に鉄の柵をはめてある。

写真7 Mさんの家の接道部分。奥に家の外壁材と同じものを貼ったコンクリート塀が見える。

写真10 Hさんの家。白い門扉のところに、白や淡い色の花の寄せ植えの鉢が並ぶ。

写真8 Mさんの家の玄関。門扉は無く、道からドアまではオープンである。

写真11 Sさんの住むアパート。柵はアルミフェンス。

写真9 Hさんの家。金網フェンスとアベリアの生垣の組み合わせ。

写真12 Yさんの家。基部はレンガで、その上に白い板の柵。オカメヅタを絡ませてある。

写真13 ブロック塀を無くして花壇をつくったFさんの家。

写真16 Rさんの家。大谷石の擁壁の上に建っている。

写真14 Fさんの家の門扉。

写真17 Rさんの家の門扉。大谷石の壁に植木鉢を下げて花を飾っている。

写真15 Tさんの家。地被にオカメツタを用いている。

3. 庭づくりの喜び

「庭づくりをしていてうれしいことは何ですか」という質問から、住み手にとっての庭の植栽の機能、庭づくりの意義を考えた。

対象者の感じている庭づくりの喜びを次の4つに分類した。

- ①植物を育てる楽しさ、植物に癒される
- ②自然を感じる
- ③プレゼントで喜ばれたり、植物をやりとりするのが楽しい
- ④人の声がうれしい

(1) 植物を育てる楽しさ、植物に癒される

植物の存在によって、またその手入れを通して心や体が癒されるという声は多かった。

また、庭で咲いた花を部屋に飾ったり（写真18）、果実（ウメ、カリン、ブドウなど）やハーブ類（バジル、フェンネル、コリアンダー、レモングラスなど）は料理やお茶に使ったり、お風呂に入れるなどの利用もされている。

写真18 庭で咲いたキクを窓辺に。(Hさん)

(2) 自然を感じる

庭にいる虫やカエル、飛んでくる鳥などの生き物の姿を見たり、庭で夜風や木陰の心地よさを味わい、季節の移り変わりや自然を感じとることも庭での楽しみのひとつとなっている。

(3) 植物をプレゼントしたりするのが楽しい

Hさんは庭に咲いた花をプレゼントすることも多い。

「どなたかに分けてあげて、喜んでもらう楽しみもありますしね。またいただく楽しみもあるし。(Iさん)」というように、増えた苗や挿し木をしたものなどをあげたり、もらったりすることも楽しみのひとつである。

Hさんは家の前に苗を出して、通る人に自由に持っていったりすることもある。

Yさんは手入れをしてる時に通りがかった人に請われて、わけてあげることもある。

(4) 人の声がうれしい

丹精してつくった花や庭を人にほめてもらうことも、庭づくりの喜びとして多くの人にあげられた。

もともと植物が好きだったり、何かのきっかけで植物に触れているうちに楽しくなり、気持ちが癒されるが、なによりも友人や通りがかりの見ず知らずの人などにほめられることが庭づくりの励みになる。

自分が庭の植栽の手入れをして楽しいというだけではなく、その成果に対して一緒に楽しんだり、ほめたりてくれたりという他人の反応を喜んでる様子が話からうかがえる。

(5) 庭づくりの喜びとコミュニケーション

これまで園芸というと、バラやランなど特定の花のマニアが秘かに庭や温室などで育てるというイメージが強かった。そして、その楽しさは「珍しい植物が育ってうれしい」「きれいな花が咲いてうれしい」という、人と植物との一対一の閉鎖的な世界の中にあった。

対象者の話からは、植物を育てる楽しさに限らず、庭で育てた植物を友達と交換したり、庭に咲いた花をプレゼントしたりといったコミュニケーションの道具としての植栽の利用がみられた。そして友人知人に限らず、通りがかりの見ず知らずの人にでも欲しいと言われれば苗や剪定した枝をあげたり、植え替えたい苗や増えすぎた苗を自由に持っていったりということも行われていた。また、近所の人や通りがかりの人などに、庭をほめられることが何よりも庭づくりの励みとなっていることがわかる。

庭の植栽をきっかけとした活発なコミュニケーションがうかがえ、そのコミュニケーションを喜び、励みにしてさらなる庭づくりに取り組んでいる姿がみられた。

4. 庭づくりの希望

今後どのような庭づくりをしていきたいかという、庭づくりの希望をたずねる質問に対しては「これ以上手が回らない」あるいは「屋上庭園が欲しい」といった、曖昧なものや実現が難しそうな回答もあったが、ここでは現実的で明確に答えられた例をとりあげる。

今後の庭づくりの希望としては、次の3点があがった。

- ①四季折々の花や実を楽しめる
- ②イメージを持って庭全体をデザインしたい
- ③家の前を通る人にも楽しんでもらえる庭にしたい

(1) 四季折々の花や実を楽しめる庭にしたい

HさんとSさんは、いつもなんらかの季節の花や実を楽しめるような庭にしたいと語った。

なお、Hさんは土づくりと資源のリサイクルを兼ねて、庭でゴミを処理していた。その他、Oさんは庭で落ち葉をためておいて土に戻していた。Sさんは、赤玉土・腐葉土・緩効性肥料など買ったものを使っているが、堆肥などは自分でアパートの裏でつくろうかと考えているところだということだった。

(2) イメージを持って庭全体をデザインしたい

Sさんは、アパートの庭の入口に「Blue Garden」と書いた小さな表札を掛けている。

Sさんはワスレナグサやロベリアなど青い花が好きで育てていて、柵や植木鉢は青いペンキで塗って統一感を出している。賃貸アパートの庭なので、柵を青く塗ったときには大家さんに怒られたそうだが、今は自由にやらせてもらえるようになった。青を中心の色（テーマカラー）として、同系色の植物を選んで組み合わせたり、アクセントに対照的な赤や白を使ったりしている。Sさんは自宅で帯の縫製の仕事をしていて、絵を描くことが好きでもあり、表現するということや色彩について気になると言う。「ただ植えるだけじゃつまらない。イメージを膨らませて植えていきたい」と言うSさんの庭は彼女のセンスが光っている。

(3) 家の前を通る人も楽しんでもくれる庭にしたい

自分のイメージを表現するように庭づくりを進めるSさんであるが、その庭は自分だけの閉じた空間にはなっていない。「向かいのアパートから見てどうかは意識して

いるかな」と言う彼女は「まず自分が楽しめればいいし、さらに他の人が楽しんでもくれればもっとうれしいじゃないですか」と、庭づくりは自分の楽しみではあるが、他の人にも楽しんでもらえればより一層うれしいと話す。

Kさんの家のまわりはブロック塀で囲われていて道から内部は見えない。塀の上と門扉のところにプランターを置いて、家の前を通る人の目を楽しませる工夫を積極的にしている（写真4・5・19）。植栽の量としては決して多くないが、家の前を通る人にも楽しんでもらいたいというKさんの気持ちが伝わってくるデザインである。

住み手の自意識過剰と自己満足のために、派手に飾りたてられただけの花は人の心には響かず、かえって町の景観破壊となる。しかし、住み手に代わって微笑んだり、そっと語りかけるような花は、Kさんの言うようにまちの中の家々に伝染する力を持っていると言える。他人にも楽しんでもらえるように気を使いながら庭づくりをしていれば、よその家の花に興味を持つことも多くなり、すてきな花のあしらいを見て、それに触発されることも多くなるだろう。

Tさんは庭づくりをできる条件として場所・健康・時間・興味をあげ、それらが揃っている自分には当然の義務があると語った。

Tさんはアメリカ留学の経験があり、Mさんは夫の転勤でアメリカに数年住んでいたことがある。このように海外で生活をしたり、旅行をした際に、個人の家の緑でも町の人と共有するという考え方を感じたり、まちの一景観としての住宅についての個人の責任感に触れる経験をすることは、今後ますます増えるだろう。

写真 19 塀の上のパンジー。イギリスの通信販売で買った種をまいて育てた珍しいタイプの花。

(4) 庭づくりの希望とコミュニケーション

今後の庭づくりに関する希望のひとつとしてあがった「四季折々の花や実を楽しめる」は、自分の育てた植物が花を咲かせたり実をつけたりするなどの植物からの反応がうれしいというもので、植物とのふれあいを楽しみたいという希望である。また、四季の変化という自然現象を味わいたいという希望でもある。

「イメージを持って庭全体をデザインしたい」という希望は、植物をペットのようにかわいがって育てるだけでなく、自分の美意識に基づいて、より美しく心地よい空間づくりをしたいというものだといえる。

「家の前を通る人にも楽しんでもらえる庭にしたい」には、庭を公的な性格をもつ場として捉え、見ず知らずの人も含む町の人々へメッセージを発する場として庭を捉えている姿勢が感じられる。また、これを希望として語らなかった人でも、植栽状況には、道からの視線を意識した配慮が明らかにみられる場合もあった。このことは庭の緑をまちの人と共有するという意識につながるもので、まち全体の快適性の向上に向けての重要な意識だと考えられる。

5. 外からも楽しんでもらう工夫

家の前を通りがかった人も楽しめるように、外からの視線を意識して、対象者の行っている工夫には次のようなものがあった。

- ・花期の長いものや常緑のものをを選び、常に花や緑が絶えないようにする。

Yさんは、花期の長いゼラニウムや常緑のオカメツタを使っている。狭いスペースだが、ツタのつるを誘引し、壁掛け式のプランターを用いて緑化している（写真12）。

- ・統一のとれたデザインで庭づくりをするために植物以外のものの取り合わせにも気を配る。

例えば、Sさんは柵や植木鉢に着色して色彩の統一をはかっている。Kさんはプラスチック製の鉢は使わず、素焼きの鉢を用いている。Hさんの家の木製鉢カバーは夫の手作り。

- ・見せたくないものは目隠しする。（写真20）
- ・季節ごとに苗を植え替えるなど、こまめな手入れをする。

写真20 Rさんの家。大谷石の塀にくぎを打ち、植木鉢を下げている。この時はサクラソウの苗が植わっていた。

6. 評価できる近隣の庭

どのような庭が地域の中で良い評価を受け、まわりに影響を与えるのかという点について探るため、対象者にお気に入りの庭を紹介してもらった。なお、Oさんは、他の家のことは気にして見ていないという回答だった。

(1) 人気の庭の共通点

「お気に入りの庭」「おすすめの庭」をたずねたところ、SさんとHさんの庭をあげる人が数名ずついた。二人の庭に共通しているのはどんな点だろうか。

まず、彼女たちの庭は緑で囲われており、視線を遮断するような塀はない（写真9・11）。どちらの庭も南向きで日照が確保されている。南に伸びていく花が道側を向いて見えるようになっていることもあり、道路に植物が通行のじゃまにならない程度にはみ出ている、親しげに顔をのぞかせているようだ（写真21）。

客を迎え入れる場所である門扉のまわりは、誰もが意匠を懲らすところではあるが、Hさんの場合は寄せ植えの鉢を並べ（写真10）、Sさんのところではツルハナナスを絡ませた鉄製のアーチ（写真22）を据えていることなどで、人をあたたかく迎え入れる意志が明確に表現されていた。

前述の「4. 庭づくりの希望」にも記したが、二人の希望は四季折々の花や実が楽しめるようにしたいという点が共通していた。そして実際、非常に多種類の植物が、それぞれの植物の生育に適した場所に植わっている。店で買ってきた花苗をただ植えたのではなく、木の花が咲いていたり、思いがけないところにこぼれ種で咲いた花

があったりして、季節感があり、自然な感じが味わえる。都内の住宅としては広さに恵まれているほうである。

また、テーマカラーを決めて植物や柵などの色彩を美しく組み合わせているので、植物の種類が多くてもまとまりがあり、洗練された印象を受ける。Sさんは柵や植木鉢に色を塗ったりして、Hさんは夫に木製鉢カバーや植木鉢を並べる棚などを手作りしてもらったりして、楽しみながら花まわりの小物にも工夫を凝らし、全体の雰囲気統一させている。

彼女たちは勉強熱心でもある。講習会の類にいろいろ参加してみたりして、気に入った方法は自分流にアレンジしながら取り入れている。

写真21 道に顔を出すキクやアメジストセージ。(Hさん)

写真22 ツルハナナスのアーチ。(Sさん)

(2) 開放的な庭

多くの人から良い評価を受ける第一条件は、開放的な外構で道から庭の中まで見通せたり、その外構自体が美しい植栽であって、通りすがりにでも眺められることである。

道からの視線は完全に遮られ、特定の人しか楽しむことのできない庭は、美しくても評価を受けることができない。

(3) 植栽から住み手の人柄がしのばれる

庭・外構の植栽は住み手をあらわす顔であり、住み手とまちの人を結ぶコミュニケーションツールとして機能することがわかった。

いつも手入れがされていたり、工夫のみられるところからは、家の人が花好きであることを感じとり、姿が見えれば話しかけたりするという回答もあった。

7. 自宅以外での庭づくり活動

庭づくりに興味を持っている人が、地域社会のための活動に興味をもち、園芸の技術をボランティアとして活かせるのか可能性をはかるために、自宅以外での庭づくりの活動を行っているかどうかたずねた。

対象者の中では、Kさんが友達の家へ植えに行くぐらいという他、自宅以外で庭づくり・花づくりをしている人はいなかった。

自転車です町を見て回るのが好きというKさんは「世田谷の所々に、ボランティアで区の空いている場所を花壇にしてるところがあるんです。たぶん、お花好きの人がしてるんですね。あれ良いアイデアですね」と住民ボランティアによる花壇の整備を評価している。

地域社会の中の庭づくり・花づくり活動ではないが、地域と結びついた活動にHさんが参加していた。23区南生活クラブ生協の委員をしているHさんは、ボランティアで月1度、お年寄りを招いて食事をしたり遊んだりする会(23区南生活クラブ生協高齢者交流会「ひこばえ」)に、1996年9月から自宅を会場として提供している。他の地区では公民館や地区の集会所を利用して、個人の家を使うのはHさんのところだけである。生協のスタッフが6～7人と80代の女性のお年寄り数人が参加している。

会は季節を盛り込んで楽しむようにしている。昼食は

既製の弁当を利用しているが、おつゆと午後のおやつは季節に合わせてスタッフが手作りしている。1996年10月はHさんの庭に咲いた様々な色の菊を鉢に飾り、11月の会では押し花を貼って色紙や一筆箋などを作った。使用したたくさんの押し花は、Hさんが自宅の庭の花や、公園で拾った木の葉などを集めて作っておいたものである。ここではHさんの庭の花と、彼女の花に関する趣味が地域社会に貢献している。

その他にも、ボランティア活動に携わっている方はいて、例えばMさんは職安で英語の通訳のボランティアをしていて、その他にキリスト教の手話通訳も勉強中。Rさんも高齢者の介護のボランティアをしている。対象者の中に、自宅以外で庭づくりや緑の管理に関するボランティア活動を行っている人はいなかったが、地域内外でのボランティア活動は行われている。

調査中に庭のほめ言葉として「わざわざ遠回りしても通りたい」という言葉が聞かれたが、行政が整備し管理している公園や道に、そのように言いたくなる例はどれほどあるだろうか。住民が自分たちの共有財産と感じられるようにするには、日常的な管理にも住民参加を可能にすることが必要であろう。

一般に地域の中でのつきあいが悪いと言われる都市地域でも、コミュニティが成熟してくれば、地域のためのボランティア活動が活発に行われるようになるであろう。環境が整えば、公共の場において住民が自主的に植栽の管理作業を行うことについても可能性の芽があると言える。私的空間である住宅の庭と共に、公的空間である街路や公園などにおいても、植栽を媒体として様々なコミュニケーションを創出できるようになれば、地域社会をより活性化させることが期待できる。行政による住宅地の緑地整備や公園管理にとどまらず、住民自身による美しく心地よい住環境づくりの活動が今後、欠かせないものとなり、そのための仕組みづくりはますます重要になるであろう。

8. 外構

住宅の敷地の中で、道路と接する部分や道路から玄関への導入部分は、私的な空間でありながら、公共空間であるまちと接する空間でもあり、住み手の好みやまちに対する姿勢が社会の視線にさらされる場所である。聞き取りを通して、庭の植栽をきっかけとするコミュニケー

ションを考える上で、住宅の外構のあり方は重要なこととあらであると強く感じられた。

家の建物を優先させると、外構の予算が足りなくなったり、気がまわらなかつたりしてしまう。十分な時間をかけて考えるゆとりがあればいいが、どうしても急いで囲ってしまう。後から具合の悪い箇所がわかってきても、壊れたのならともかく、「何となく気に入らない」という程度では、費用がかかることでもあり、外構を改修するまでにはいたらないというケースは多いのではないだろうか。

Fさんは、家を工事する機会に道路際のブロック塀を取り除き、その場所を花壇にした(写真13・14・23)。ブロック塀を除いて植栽地にしたことで、Fさんには庭づくりの楽しみが生まれた。同時に狭い道の安全性はわずかな距離ながら向上し、道の景観としても良くなった。調査地のように一軒一軒が密集して建っている都市住宅地においては、住宅の植栽は道を歩いているときに目に入る貴重な緑である。まちの防災を考える上でも環境植栽の持つ役割は大きい。阪神淡路大震災の影響もあつてか、細い道でのブロック塀は怖いという声はRさんから聞かれた。

家々が密集して建ち並び、各戸の敷地が狭い都市住宅地では、写真24のようにドアを開ければすぐ道路という場合もある。敷地に十分なゆとりがあれば公的なスペースとプライベートなスペースを明確に分けて庭をデザインすることができるが、狭い敷地を活用するためには、外構に複合的機能が求められ、家と外構を一体的に考えていく必要がより強くなる。対象者の中にはブロック塀

写真23 狭い道に面したFさんの花壇。花壇ができて道の印象が明るくなったという近所の人の声も聞かれた。

の上や門扉のところに鉢を置いたりして、ブロック塀のように遮蔽性の高い外構でも外から見て楽しめるように工夫している人がいたが、外構のデザインがそもそも開放的で内からも外からも緑が楽しめるようにつくられている方が望ましい。

調査地にあり、調査の際にご協力いただいた「くらしから住まいづくり支援ハウス」という様々な専門家による非営利のグループは、住宅まわりの改善と改修を主とした啓発や相談の支援活動を行っている。ハウスは、安全で安心でき、住む人が豊かになれる住宅まわりを作るための相談活動やネットワークづくりを、平成6年から進めている。平成9年度の作業の一つとして、都市住宅が建設される中での外構の実態と問題、課題を探り、サポートシステムなどへの提言するのを目的とし、世田谷区代田・梅丘地域の住民を対象に外構の実態調査を行った。住宅に比べて住宅まわりについては情報が少ない。家の外まわりが何となく気に入らなくても、具体的にどうしたらいいのかわからないという人も多いとみられる。くらしから住まいづくり支援ハウスの取り組みは貴重なもので、今後の活動にも注目したい。

写真 24 対象地内の小さな庭。

9. おわりに

10人という限られた対象者の聞き取りからではあるが、庭の作り手のまわりでは植栽をきっかけにして、多様なコミュニケーションが発生しており、それが庭づくりの楽しみや喜びにもつながっていることが確認できたように思う。

庭づくりの何よりも励みとなるのは、近所の人や通りがかりの人に庭をほめられることであり、その点が多くの人に共通していた。言葉として「きれいですね」と話しかけられなくても、歩いてきた人が足を止めて花を見ていたり、微笑んだりする姿は、庭の作り手にとって、うれしい反応であろう。緑をきっかけに、言語によらないコミュニケーション (nonverbal communication) が生まれる。また、庭の植栽については、気軽に話題にして話しかけられること、見知らぬ人にほめられても素直に喜べるのが、コミュニケーションツールとして植物が持つ特徴の一面を示している。

対象者から「(庭づくりは) 自分の楽しみではあるが、他の人にも楽しんでもらえればより一層うれしい」「個人の家の緑でも近所の人と共有したい」などの声が聞かれると共に、道行く人の目を楽しませるための配慮も見られた。そのような緑には、「うちの花や緑と一緒に楽しんでください」というまちの人に向けてのメッセージが感じられる。お仕着せの花いっぱい運動よりむしろ、個々の家がそれぞれの顔としての庭・外構を磨いていくことが、本質的なまちの顔づくりや快適環境づくりにつながり、広がり、継続していくのではないだろうか。一軒の住宅の植栽がまちの景観形成につながっていくことについては、「自分がまちを歩いていて、庭先の花がきれいな家があるとうれしく思うので、自分のうちもできる限り花をきれいにしておきたい」「一軒のうちに花を飾ってきれいにすると、まわりのうちに伝染する」といった対象者の話からも、その可能性が見いだせる。

今回の調査対象者は全員女性で、ほとんどの人が昼間家にいる時間の長い、主婦や家で仕事をしている人であった。同じ屋根の下に住む家族でも、ひとりひとりの庭に対する考え方や接し方は異なる。例えばTさんは、結婚して嫁いできたときにはお姑さんの伝統的な和風の庭の趣味を尊重し、花一本植えられなかったが、家を建て直した頃から、自由に手を入れるようになったと語った。対象者の属性の違いや、対象地の地域特性などに

よって、住宅の植栽に求められるものには相違があると考えられ、検討が必要である。

住宅の様式も住み手のライフスタイルも変化しており、いわゆる和風庭園ではそれらと調和がとれなくなっている。住み手が住まいに求めるものの変化に対応した庭づくりが求められる。また一方で、外構のデザインについて無関心な住み手が多いのも現実である。外から見える部分はまちの景観を構成する一要素となり、公共性をもたなければならない。枯れたまま長い間放ってあったり、建物のデザインと調和していない花やその鉢は、まちの景観破壊につながってしまう。

これらのことから、まちの景観要素のひとつともなる住宅の植栽に関しては、専門家による啓発活動やサポート等が必要で、そのあり方にはまだ課題が多いように考えられる。庭・外構に関わる人同士のコミュニケーション・合意形成にも問題がありそうである。まちの一緑地として、また住民同士が心を通わせる媒体としての庭・外構のあり方についてはさらなる研究が望まれる。

引用・参考文献

- 1) 三沢彰:道路の緑の機能、ソフトサイエンス社、7-10、1995.
- 2) 正木覚:建築知識 3月号、50-51、1996.
- 3) 小野佐和子:庭づくりによる環境の個人化、造園雑誌 57 (5)、43-48、1994.
- 4) 藤井英二郎:見る庭と触れる庭、淡交社、1995.